

平成 29 年度派遣者報告書（抜粋）

●私は理系の学生ではあるが、どのような研究をするにしても、今や国際協調は必須であり、特に近年飛躍的な発展を続ける中国の公用語、中国語(普通話)を身に付ければ必ず役に立つであろうと考えた。一般的に、語学を身に付けるためには、実際に現地に赴き、そこで生活してみるのが一番であると言われている。このプログラムは、三週間という長すぎず短すぎないちょうどよい滞在期間で、しかも春休みを有効活用できるため、この目的を果たすためにはうってつけの物に思われた。正直、生まれてこの方海外に行ったことがなく、福岡以外の場所に住んだこともない私が、慣れない土地での海外生活に耐えられるのか不安ではあったが、この時点で、私は「CLP-C に参加する事」を目標、モチベーションにしてこの1年、中国語の勉強に励もうと心に決めた。

その後、私は中国語Ⅰ、中国語Ⅱの授業は無論、中国語実践Ⅰの授業を受けたり、毎週金曜日のランゲージテーブルに参加して会話練習をしたり、ラジオやテレビの中国語講座を聴いたりなど、なるべく多く中国語に触れるように努めた。そしてあっという間に時間は過ぎ、申込書類提出、それからしばらくして結果通知。待ちに待った結果は、合格。この知らせを受けて、私はより一層中国語の勉強に力が入り、現地での授業や生活で使えるような単語や表現をなるべく多く身に付けるべく努力した。

現地での言語授業は、ただ覚えた文句を暗唱するだけではなく、文を見ずに相手の目をみて話すという実践的な会話練習がたびたび行われ、こうした練習を繰り返すうちに「中国語を話す感覚」が少しずつ身についていくのを実感した。授業のレベルとしては、先生がかなり気を付けて話してくださっているおかげか、知らない単語や表現は多々あるものの、ついていけないということはなく、ほっとした。この言語授業を通して、今まであまり意識してこなかった「中国語で会話する時のレスポンス」を向上させることができた実感している。まだまだ相手が何を言っているのかすべてを聞き取るのは難しいが、何か語りかけられたときに反応するスピードが格段にあがった。

三週間を通して強く実感したのは、「百聞は一見に如かず」ということだ。実際、台湾に渡る前に現地でも使いそうな表現や、現地の習慣を調べたり、留学生に聞いたりしたが、いざ台湾で実践しようとしてもうまく伝わらなかったり、誤った受け取り方をされたりして悔しい思いをすることが多々あった。その一方、一回うまくいかなかった体験をした後、調べて練習してからもう一度挑戦してみると大概上手くいったし、頭の中にしっかりと定着している実感があった。こうした体験を繰り返すことは、確実に語学力の向上につながる。さらに、何事も実践あるのみという考え方は今後の学校生活、ひいては将来(社会人になってからも)役に立つであろうし、人生をより有意義で面白いものにしてくれるのではないだろうか。僭越ながら、今後、このプログラムに参加するか検討中の方にアドバイスするとすれば、行くかどうか迷うくらいならば、とりあえず申し込んでみた方がいいと思う。何事も試してみないと現状から何も変わらないということが今回の研修で私が得た教訓である。

●研修への参加が決定したとき、3週間という短い期間の中で「スピーキング力・リスニング力を強化する」という目標を掲げた。

しかしながら、日本で学んだ内容は理解できているから大丈夫だろう、という私の自信は初期の段階

で簡単に打ち砕かれた。開講式の先生の話は日本語訳がないと全く聞き取れず、そのあとの面接では言いたいことがなかなか出てこず、自分の無力さを痛感した。聞き取れず話せないことへの焦りで、最初の3日間は既に1週間近く滞在しているのではないかと思うほどに長く感じた。

本格的に授業が始まると、徐々に中国語を聞く・話すということに慣れてきた。先生がおっしゃっていることが7~8割程度理解でき、自分にちょうど良いレベルだった。話している音が自分の頭の中で漢字として理解できた時はとても嬉しく、自信になった。反対に意味が理解できなかった時は、もっと勉強しなければと思い、モチベーションを保つことができた。先生は、毎回非常に楽しく実践的な授業をしてくださった。私のつたない中国語を最後まで真剣に聞いてくださり、わからない単語があっても極力英語を使わず中国語とジェスチャーだけで教えてくださった。本当に良い先生のもとで3週間学ぶことができ、たくさんのことを吸収できた。私も3週間という短い期間の中で最大限に力を伸ばすため、先生に少しでもわからなかった点を質問し、移動時も電車でなく歩くことによって授業外でも多くのことを学ぶことができた。

今回の研修で最も痛感したこと、それは「言語を書いたり見たりして理解する力と、聞いて理解し自分の意思を的確に話して伝える力は全く別のものである」ということだ。定期テストや普段の小テストなどで特に困ることはなかった私が現地で軽い絶望感を味わったのは、間違いなく日本で実践的に中国語を使う機会が少なかったからだ。現地で不自由なく過ごせるレベルまでもっていくには、文法や単語を覚えることはもちろん、リスニングとスピーキング力を上げるが必要不可欠であると研修を通じて感じた。中国語は多くの学生が第二外国語として選択しているが、残念ながら実践する機会が少ないまま学び終えてしまっており、もっと実践の機会が与えられるべきだと考えた。ある程度の文法と単語を身につけた1年生の春という段階でこの研修に参加できたことで、今までの学びを自分のものにできたと同時に、今後も継続的に学び中国人と対等に会話できるようになるという新たな目標も生まれた。

●派遣中に九州大学台湾同窓会が企画してくださった特別講義では、CIER、中華経済研究院の魏先生から台湾経済と日本経済の関わりについての授業を聞くことが出来た。台湾の経済についての話題は、なかなか日本で聞くことが出来ないため、非常に興味深かった。それだけでなく、今まで大学で経済分野についての授業を受けたことがあまりなかったので、経済について知る良い機会となった。日本と台湾の経済は同じ種類の物を作って争うような競争関係ではなく日本から材料や部品、生産設備を輸入し、台湾で生産し、台湾がそれを輸出するというような補完関係にあり、お互いに重要な貿易国であることを始めて知った。また、台湾や日本だけでなく、東南アジアの新興国市場や経済状況についてのお話や中小企業や財閥企業といった企業の形態による性質の違いについても聞くことが出来た。

文化授業は、太極拳、中国結、篆刻の授業を受けた。体験だけでなく、物を実際に制作することもできるので、非常に文化授業を楽しみにしていた。太極拳では太極拳の基本の型を教わった。最後に、先生のお手本なしに、生徒たちだけで型を順番に一周したが、型を覚えて実際にやってみるのは非常に難しかった。また、太極拳の陰陽といった由来などについても聞くことが出来た。中国結では、中国結でコースターを作成した。チャイナ服や中国風の飾り物によくついている複雑で綺麗な組紐を果たして、自分で作ることが出来るのだろうかと思ったが、先生の指導や丁寧な作り方のプリントのおかげでなんとか作ることが出来た。篆刻の授業では、消しゴムハンコで篆書という字体の字を彫った。なかなか篆書体を目

にする機会は少なく、漢字の美しさを改めて感じた。また篆刻の先生がもっとこうの方が良くなるのではといったアドバイスを中国語でしてくださり、文化だけでなく中国語の勉強にもなったと思う。

校外授業で私は故宮、淡水、十分を選択した。最初に行った故宮では、ずっと観てみたかった有名な白菜や肉形石だけでなく、皇帝の肖像画、様々なコレクション、美しい陶磁器や装飾品などたくさんの素晴らしい芸術品を鑑賞することが出来た。また故宮博物院は非常に展示室が広く、その広い展示室がいくつもあり、故宮博物院の規模の大きさが感じられた。十分では、最初に十分大瀑布の滝を見て、台湾の自然の雄大さを感じた。十分で私が最も印象に残ったのは、ランタンを飛ばす体験だった。ランタンを空に飛ばすということは、日本ではなかなか出来ないものであり、ランタンが空に飛んでいく光景はとても美しかった。このように、私は台湾で様々な貴重な体験ができたと思う。言語を学ぶだけでなく、文化や慣習、歴史など様々なことを学んで吸収することが出来た。